美術の窓(81)

奈良国立博物館で「伝日光・月光菩薩立像」を見る

大和文華館館長　水田　徹

去る四月末の数日間、奈良博で開催中の特別展「東大寺のすべて」の第一室に、私の足は釘付けされました。法華堂（三月堂）の伝日光・月光菩薩立像が史上初めて寺外で公開され、適切な照明のもと間近に、四方からくまなく拝観することが出来たからです。とりわけ有難いことに、両像が正確に正面向き、かつ左右対称に安置され、しかも像の前方と左右に十分な引きが確保されていたために、床材の継ぎ目を頼りに歩を進めることによって、任意の点から等距離、同角度で両像を見比べることが出来たのです。

その結果とくに目を引いたのは、一見同体のように見える両像が、実は極めて周到に計算されたと思われる対比の妙を見せていることでした。この点は今回の展覧会図録でも指摘され、多くの美術書でも夙に強調されているところですが、先述のような好条件のもとで改めて仔細に観察してみると、その対比は着衣の異同による衣文のつくりにおいてだけではなく、姿態ひいては像に込められた意味合いそのものにも及んでいるように思われてなりません。いささか煩雑になりますが、両像の対比点を逐一列挙してみましょう。

まず両像を真横から見て気付くのですが、伝日光像が背筋を伸ばし加減にやや前傾姿勢をとっているのに対し、伝月光像はわずかに腰を落とし気味ながら直立しています。この立ちポーズの微妙な違いは、横から見た際の合掌する手の構えとも対応しているようです。手首と指先を結ぶ線が日光の方が月光より傾斜が強く、手先をやや前方に突き出しているのに対して、月光の手はやや立ち気味に、より胸元近くに構えられています。総じて、伝日光像の祈りがより積極的に、いわば外に向けられている感がするのに対して、伝月光像の祈りは静かに内に込められているとでも申せましょうか。

この立ちポーズの違いは頭部の表現にも反映しています。同じく真横から見比べると、日光像の喉元の輪郭線は前傾し、月光像のはほぼ垂直に走っているのがわかります。これに呼応して大衣の襟の線も、日光では肩口から始まって胸元の方へカーヴしていますが、月光では襟の後方の端が背中まで回り込み、上半身が直立態であることに見事に対応しています。細かいことですが、冠帯の正面に張り付いた菊花飾りも、日光のはほぼ垂直に立ち、月光のはやや仰向けに傾斜しています。

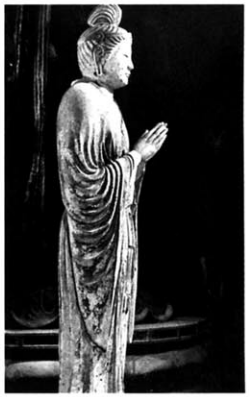
髻のつくりにも微妙な違いが認められます。共に美しく整えた毛束を丸く巻き込んでありますが、側面観では髻全体の重心が日光像においてはやや前方（額側）に移動し、月光では頭頂のほぼ真上に位置しています。髻の一番内側に巻き込んだ毛束（正面から見て左右両端の毛束）も、日光像では残余の毛束と同様に額側に傾いた不定三角形状に表されていますが、月光像のは最後のところで鋭角に折り返し、先端は丘状になだらかなカーヴを描いています。つまり日光では体躯の前方への動きに応じ髻も軽く額側に迫り出し、一方月光の髻は腰を落とした直立態のポーズにふさわしく、重力に逆らわずに静かに頭頂に載っています。身体の動きを視野に入れた見事な写実というべきでしょう。

側面からの観察でいま一つ注目されるのが眼の表現の違いです。共に緩やかなカーヴを描いていますが、そのカーヴの中心軸は、日光像においては水平約10度、月光像ではおよそ30度に傾いています。日光像の方が前傾姿勢をとっているという事実にこれは一見矛盾しているように思われますが、正面に廻って見るとその謎は解けます。両像ともに右眼の方が僅かにつり上がっているものの、日光像の両眼はほぼ水平に並び、月光像は左眼もつり上がっています。その結果、両眼を結ぶ線が月光像ではゆるやかな谷状の折れ線となり、それが先ほどの側面観で、眼の軸線のより強い傾斜となって現れていたのです。眉の形もこれに呼応し、日光の眉が二つの円弧のつながりであるのに対し、月光では二本の眉が放物線状に立ち上がり、鼻筋に向け鋭く深い谷型の延長線を辿ることができます。

一方はあくまでも前方直視型、他方は下目遣い型ともいえるこの眼差しの違いは、先述の立ちポーズの違いと見事に呼応しつつ、最終的には伝日光像をやや若造り、伝月光像をより内省的な壮年風に見せている、と総括できるのではないでしょうか。『正倉院文書』によれば、大仏開眼会に合わせるように制作された黒漆塗りの「六宗厨子」に、老壮の区別をつけた16体の尊像が描かれていたといいます。伝日光像の額の髪の生え際の丸味ある造形に若さの息吹を、伝月光像の頭髪の鋭く整った篦さばきに壮年の落着きと威厳を感じるのは私だけでしょうか。

これほど徹底して対比の妙を見せた天平彫刻は、私の知る限り、東大寺・戒壇堂の四天王像を措いてほかにありません。そして今度はその四天王像が伝日光・月光像に代わって展示されるといいます。果たして同類・同質の対比の極意が見えてくるでしょうか。更なる比較観察が伝日光・月光像の本来の尊名と安置堂宇を解き明かす縁のひとつとなるでしょうか。私はもう今からわくわくしています。

伝月光菩薩像（右側面図）



伝日光菩薩像（左側面図）

季刊 美のたより №139
平成14年 7 月 5 日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.